



ジャガイモの世界史：歴史を動かした「貧者のパン」

伊藤章治著 中央公論新社 2008 (中公新書)

ジャンヌ=ダルクの百年戦争

堀越孝一著 清水書院 1984 (清水新書)

文学部教授 近江 吉明

おそらく、今、窮屈だった高校「世界史」に追いまくられ、押し花のごとく味も素っ気も無い受験「世界史」に付き合ってきた諸君たちにとって、この「世界史」の三文字は、忘れてしまいたい対象でしかないかもしれない。だが、上記の二冊はそうした思いの強い君にはうってつけの解毒剤になること間違いない。この機会に、これまでの思い込みと幻想の世界にはさっさと見切りをつけて、いよいよ本格的な世界史の大海原に君が「作り上げた船」で漕ぎ出してみよう。

まず、伊藤さんの本では、フライドポテトやジャガバタなどでお馴染みの、あの「ジャガイモ」が世界の歴史を根本のところ規定し、ここまでの近・現代史の主演として多くの人々を支えてきたことが豊富な史資料や調査データを基に語られる。「エー?ウッソー!」と思う君は読んでみるといい。アイルランドやイングランドで、ドイツやフランスで、はたまたロシアや日本で、元来これらの地には存在しなかったジャガイモがいかに歴史を作り出したのが、歯切れのいい語り口で綴られている。食文化論を奏でながら、歴史の大舞台はこんな風に解釈できるのだということを証明しつつ、同時にジャガイモにひそむ歴史の事実を紡ぎだし、庶民の歴史を飾ること無く再現して見せてくれる。そして「貧者のパン」としてのジャガイモが、これからは「平和のパン」になりうることも予測してくれる。

次の堀越さんの仕事からは、今日の私たちの歴史認識の独りよがりさ加減が明らかにされる。対象となるのは、ほとんど誰もが「知っている」はずのジャンヌ=ダルクである。ところが、どういう訳か彼女を「救国の聖女」として「偉人」扱いする傾向が強い。ルーアンでの宗教裁判の結果、火刑に処せられたことからくる彼女へ憐憫の情が、この思いに油を注いでいるという。しかし、ナポレオン1世が彼女に「救国」のイメージを焼き付けるまで、フランスでも知られてはいなかった人物なのだ。つまり、近代社会が都合の良いように作り上げた虚像でしかないのだということをさりげなく示してくれる。そもそも15世紀の百年戦争の時代に「フランス」はまだ成立していなかったとの指摘は、君たちを大いに悩ましてくれるに違いない。現実のジャンヌはごくあたりまえの少女で、感受性鋭く、霊的な刺激に感じ易い、今の社会にもみられる普通の人であった。ただ、その時代の政治にからめとられてしまったただけだというのが。さて、君たちにはどう反論できるだろうか。